



たちが入れ替わり立ち代わり来るんです。炊き出しをする人たちもいれば、演奏をする人たちや、マッサージュをする人たちもいる。また、子どもたちと遊んだり、生活習慣病にならないように運動を教えてください。人たちも来るという状況でした。

女川町には教会もなかったのですが、私はまずまず教会から遠ざかってしまいました。ある時ボランティアの方々からフルート演奏に来たのでみんなで聴きに行ったら、讚美歌を演奏してくれたんですが、曲を聴きながらその時はじめて神様を意識しました。たまたま日曜日でしたが、胸に込みあげるものがあつて……。そして、私は女川町に派遣されているのかもしれないなあと、実感したのがこの時でした。

継続して女川町に関わって多くの方の話を聞く中で感じたのは、これって野宿者のパトロールをしている時の会話とか、寿のおじさんたちとの会話とかとすごく似ているな、ということでした。これってなんだろうって考えた時に自分なりにわかったのが、しんどい状況にあつても、目の前にいる私と向き合っていてくれているということ。私は聞く姿勢というのをその方々に教えてもらっていたんだと、気づきました。思いもかけない、自分の責任ばかりとは言えない事柄から、苦しい生活を強いられている人たち。これと被災地の方々も似ていました。そして、女川の方々も出会うことが、だんだん楽しいと思えるようになりました。

### 続けていくことの中で

今私は、仮設住宅での歯科保健活動をしています。活動内容が変わっていくのは、

町の方々のニーズが変わっていくからなのですが、行く度に町も変わってきています。瓦礫の山が見るたびに少なくなり、道路も普通に車が走れるようになりました。町の方々も生きるといいうことに目が向きはじめて、コンテナを利用したコンビニやお花屋さんなどの商店街が出来ました。仮設住宅に移った方の生活も夏は暑さをどうするかでしたが、今は寒さとの戦い。日のあたる場所でも、氷の割れないぐらいの寒さです。

私といえば、町に知り合いが増えてきて、「また来たね」と挨拶されることが多くなりました。とても嬉しいことです。《できる限り会おう》ということが大事なんだと思います。私は人と関わるのが好き。「すなおさん」って名前を覚えてもらえることはとっても嬉しいことです。だから私も、相手の名前を呼べるような関係を作りたいと思っています。

今コーディネートしてくださっている歯科医師の先生は、もともと野宿者関連のボランティアをされていて、昔寿にも来ていた人。そういった方々との出会いもあつて、超寿っ子であつた私が、昨年は新宿医療班の夏祭りや歯科検診のお手伝いをさせてもらいました。こういった活動から、自分の活動範囲も広がってきています。

今回、改めて今までのことを振り返り、自分は多くのことに導かれて、今、女川町と関わっているのだと思います。

### 教会への問い

私は共同体としてすごく苦手なんです。教会員は神様の家族なんだよ、とかいうことが苦手なんです。この震災は、被災さ

れた方々が家族にならざるを得ない状況を作り出したのではないかと感じています。避難所で共同生活をして、仮設住宅でもコミュニティを作らないと生活していけないわけですね。この活動を通して「共に生きること」を少し学んだと思います。けつして何かできるわけではないけど、一緒にいるということが、共に生きることのひとつの形ではないかと思っています。

今まで寿町と関わってきましたが、こう思った時に、町の人たちと向き合っていないことに気がつきました。町の人たちと挨拶はするけどそれ以上ではない。この思いが、なか伝道所転会への背中を押してくれました。

日曜午前中になか伝に来ることになって、寿で行われている医療班活動にちよく顔を出せるようになりました。そうすると今までバザーでは挨拶程度のおじさんが相談に来てくれて、今までの人生とかの話をしてくれる。それによって、平面的な関わりが立体的になって、その人そのものを知ることが出来るようになって……。それぞれが背負ってきた重荷とか生活を聞くことが出来て、いい機会を与えられたと思っています。

被災地の救援に関わり、寿といっそう深く関わるようになって、教会が、被災地や寄せ場のような、人びとの苦しみのある現場に身を置くこと、またそこに体を運んで行って肌で感じる大切なのだと知らされました。

これからも、なか伝や寿地区センターを足場にしながら、寿と深く関わっていきたいと思っています。

(まとめ・渡辺幸子)

### 風景

#### 救援物資に運ばれて⑤ 郭鐘洙

石巻の惨状は言葉を超えていた。コンビニの中に車が倒れ込み、看板の上に二、三台の車が重なっていた。

「ここが有名な豆腐屋だった。ああ！ あそこはわれわれがいつも教師会を開くお店だった。ここはディスプレイの大きな酒屋だった。」

信号機は四五度に倒れ、折れ曲がり、建物もほとんどがやられ、どこが通りか判別できなかった。津波ですべてが流失、変形。泥に被われ、剥ぎ取られ、車が至る所に重なり倒れていた。

われわれは高台の公園（日和山公園）に登った。そこには神社もあり、公園の外には民家もあった。そこから石巻港も一望にできた。至る所に大小、赤や白青の船が、船底を見せて港の丘に散乱していた。港町はガレキと化していた。よく見るとお寺の瓦屋根の残骸もあった。水産加工工場も割り箸のように鉄骨だけを残り、鉛のように曲がっていた。「全部さら地にしないとだめだ」と、校長が静かに吐き捨てた。まるで自身に言い聞かせるように。確かに吐き捨てるようなつぶやきだった。

わたしたちは三〇分の間、神社のある松林の高台の公園を巡り、石巻の港町を見下ろして佇んでいた。私は自分の思考が蒸発してしまつて言葉を失つてしまつていた。祈ることができずにただ茫然と佇んでいた。私の信仰と虚無感との間に距離はなかった。涙がこみ上げた。一瞬心のどこかで矢のように、「こんななら、このまま死んじやった方がましだ。」と叫んだような気がした。わたしたちは、その高台の公園の入口の売店で、湯気の立つおでんを食べ、高台を後にした。

# 神の息

渡辺英俊

主なる神は土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

（創世記二章七節）

いのちとは？

人間は、命の息を鼻に吹き込まれることによって「生きる者」となった……という、よく知られた創世記の神話なんですけど……。これは人間の命というものについて、考えさせられることを多く含んでいるんですね。

人間は「土」の塵で造られたんで、「人間」という名をつけられた。つまり、「存在」という面からみれば、自然界の他の被造物と同じで、神とは絶対的に違う……。これは当たり前と言えども、当たり前前なんですけど……。二十世紀の教会を支配してきた教えでは、この、「存在」としての絶対的な違いという側面からだけ、人間を見てきたきらいがあると思っ

価値のない存在なんだ……とね。

けれども、聖書の神話は、人間の命というのはそれだけじゃないと言っんです。神によって鼻に息を吹き入れられて生きた者となった、ということですよ。今、自分のこととして、この場面を想像してみませんか？ 土で造られたばかりの、デク人形みたいな自分がここにいます。存在としてはほとんど価値がない。お金に換算したら何百円くらいにしかならない……。バケツ一杯半くらい

の水であらかたできている「私」なんですけど……。神が、その私の鼻に息を吹き入れて下さる！？ そのとき、神が吹けば、神が怒っているのだと恐れ

は私から見てどの位置にいるんでしょうか？ けっして天の高いところから見下ろしているんじゃないですよ。私と同じ地べたで、私の目の前にいるんでしょう？ 自分のため息が相手の顔にかなり、相手のささやき声が耳に聞こえるような距離にいるわけでしょう？ 顔と顔を合わせて神と向かい合っている近さ、つながりの強さ……。こちらがそれを知らなくても、息を吹きかけて下さる神が目の前にいて、私を支えていてくださるということ。鼻に息を吹き入れられるとはそういうことで、その神との近さとながりの強さが、私にとっての「命」なんです。

いのちの息とは？

神話的世界に生きていた人々にとつて、「息」は「霊」だった……。風は神の息で、頬をそよ風がなでて行けば、神がそっと吹いて下さっていると感じた……。嵐が吹けば、神が怒っているのだと恐れ

## エー・ビー

（言葉を覚え始めた莉己と「イナイ、イナイ、バー」をしていたとき）

りき「……バア……。」  
かほ「バーって言えるようになっただね。きつと、こころの中で練習してたんだね。」

（門山果穂 五才 莉己 一才）

矢本第一中学校に戻る途中、わたしたちは何度も道を間違えた。大通りから一度中に入ってしまったと、道らしい道はなかった。一度は、まっすぐに町の商店街を走って行くけど、急に道路が三メートルほども陥没して、急にあわや大事故になることだった。信号もなければ、町並みもなければ、道路らしい道路もないのだ。帰り道、湖になった田圃を見ながら、反対側の東北工業高校の柵に貼られた「屍体安置所」の青白い文字を目で追いながら、中学校に戻った。

三月二六日夕暮れ迫る頃、これ以上長居をして校長に迷惑をかけるわけにはいかない。彼と見回った東松島と石巻の光景をわたしたちははつきりと目に焼き付けた。私は校長に握手を求めながら別れの言葉を探した。何を言っても流れてしまう。私はいくらでも、意を決してとつさに最後の言葉を発した。

「あんまり頑張らないでください。……頑張らないようにして、頑張ってください。」そしてとつさに、「三という数字を大事にしてください。」と続けた。両手の人差し指を出して、「人」という字はこうですが、もう一本入ったらなかなか倒れにくいのですから。」と結んだ。

私はまたとつさに家族の消息板になっている掲示板を撮ってもよいか、校長に尋ねた。弟に、ほんの数分間に数十枚の写真を撮ってもらった。そして最後に校長と並んで写真を撮った。撮り終わると早々に、わたしたち四人は車に乗り込み、東松島市立矢本第一中学校をあとにした。振り返ると、わたしたちが校門を出て見えなくなるまで、校長は直立不動の姿勢で見送ってくれていた。

私は帰り道、涙しつつヨブのことを思った。私は今現地に行つて祈れなかつた分、日々主に祈る努力をしている。

（完）

……。この感覚は、気持ちとしてわかるんじゃないでしょうか。

現代人でも、自然の中に身を置いたとき深い安らぎを感じて、創造者に生かされている自分を実感したりするのは、古代の人びとが息や霊と呼んだものと通じていると思うんですよ。神の造られた世界には、自然世界を動かす神の力としてのエネルギーが浸透している……。それが「霊」なんです。

その「霊」が、人間には特別に鼻に吹き入れられた……。顔と顔を合わせて向き合うような神とのつながりの力として……。だから、「息」は人間の中に

吹き入れられて、愛する能力になるんです。愛というのは不思議なエネルギーで……。わたしたちの中で働いてわたしたちを生き活きさせ、動き出すエネルギーを生み出すんですよ。正にそれが「いのち」ということで、創世記の神話は、愛が人間に命を吹き込むことを素朴な物語として語っているんだと思うんですよ。

神にそっくり？  
人間は、確かに存在としては「土の塵」で、神とはまったく違うものかも知れませんが、でも、愛することがで

きるということ……。愛という振る舞い方では、神とそっくりに造られているんです。神は人間を「罪人」として造られたんじゃない……。ご自分にそっくりな振る舞い方をする者として、つまり、愛することによって命を發揮し、生き活きと喜んで生きられる者として造られたんだ……。というのが、聖書の教えなんです。

だから、同じ仲間の人間が踏みこじられ、尊厳が侵されるような状態にいるのを見たら、黙って見ていることはできない……。思わず体が動いてしまう……。というのが人間なんです。金持ちが貧しい人びとから搾り取るような不正義のシステムがまかり通っている社会の在りようをみたら、それを変えるために体を動かさずにはいられない……。そして、そのように体を動かすことができたなら、損得を抜きにして喜びを感じる……。本来そういうふうに人間は造られているんです。

人間は一人一人が、命の息を鼻に吹き入れられた存在として、神に似せて造られている……。これはチップケなことでいいんです。神が目の前に顔を寄せて、私の思いを感じて下さり、私のため息を受け止めて下さる……。一人一人

の人間の存在の重さというのは、そこにあるんだと思うんですよ。

\* \* \*

支援献金 (二月分)

支援献金 (二月分)

クリスマス献金 (1/22 ~ 2/26)

感謝してご報告いたします。

## まど

▽改定入管法の施行を七月に控え、問題点が何もクリアされな

二六日難民・移住労働者問題キリスト教連絡会(東京)で難民申請者たちへ、パワポイントを使って説明会。説明しながら、何でこんな仕組みの制度を作らねばならないのかと腹が立つことしきり。しかし、タイ人のコミュニティでは、言葉の壁がとれたせいもあり、質問責めとお互いのやりとりでワイワイになりながら、新しい交流・協力の芽が。

▽ともかく、何が起ころうとしているのかを当事者に知らせるべく、一月三日川崎のカトリック教会で、同二九日足もとのカラバオの会で、三月一日市内今宿団地の集会所でタイ人のコミュニティ

▽北村牧師訴訟第一回公判が四月二六日に決定。三月一三日、支援会・弁護団と拡大訴訟対策委員会。手続き上の違法が重なって、四〇年間まじめに務めてきた牧師にいきなり免職という人権侵害。この非道を裁判所にわかつて貰うべく。支援の広がり大きな力に。(渡辺英俊)

## 編集後記

■出会いの機会を大切に、目の前にいる人と真剣に向き合おうとしているすなおさんの姿勢に、もう一度自分の生き方を考えさせられた学習会でした。  
■福島第一原発の事故からも一年。問題は山積みなのに、大飯原発に再稼働の話が出るのは許せません。(幸)